

【コンペティションⅡ総評】

コンペティションⅡでは毎年、良い意味でファイナリストに裏切られます。映像審査を経て目の前に現れる振付家・ダンサー（今年は亀も！）たちは、私の想像を遥かに超えた作品を見せてくれます。驚くこともあるし、「あれ？こんな雰囲気だったかな？」と考えているうちに、あっという間に時が過ぎていきます。凝縮されたエネルギーを全身で浴び、心地よい疲労感と満足感を覚えつつ審査会に臨んでいます。

本当に踊ることが大好きだという真っ直ぐな気持ちや、これまでの自分とは変化していきたいと渴望する身体、環境との共存・調和を図ることで観客の存在も含めて構築されていく時間。どの作品も個性と魅力に溢れていました。その中でも、次の作品でも「裏切ってくれるだろう」と強く感じた田村虹賀さんが最優秀新人賞に選ばれたのだと思います。

実際にファイナリストたちと対話してみると、創作を楽しんでいるのだな、と感じます。そして同じだけ、悩んだり・迷ったりもしていることも。その気持ちを決して忘れることなく、創り続けてください。そして、観客の凝り固まった価値観を鮮やかに裏切ってくれることを、心から楽しみにしています。

加藤弓奈（NPO 法人アートプラットフォーム 理事）

多様な文化が交差する事を目的とするヨコハマダンスコレクションにおいて、今年はまさに個性豊かな振付家達が名を連ねたと言える。

《独創性》を追求された、田村虹賀、牛谷匠耀、多炭真歩、阪田小波、のよ。《演出・構成・空間》に特化された、外山陽大、上田園乃。《ダンススキル》を求めた、武藤光由、杉野真尋、横井伽歩。コンテンポラリーダンスの現在地を観客は心の底から楽しむ事ができた事だろう。賞を受賞するには至らなかったが、特に、のよさんの作品『Chrysalis』は、創作過程が特殊であった。身体のラインに張り巡らされた電飾がなんとも不思議な空間を作り上げた。昆虫の孵化する姿を可視化する方法を模索する中で発見された表現方法が、作品の格となったことは、本人にとっても予想を超える結果を生むこととなったそう。シンプルに〈やりたい事〉が先にあっての創作方法だ。何故やりたいか？ではなく、やりたいからやる。いつまでも芸術のスタートはそんなところから発生してほしい。今回の出場者の面々は、これからもそんなアイデアの種の育て方をしていく事に違いない。

スズキ拓朗（CHAiroidPLIN 主宰、ダンサー、振付家、演出家）

今年の10作品は似ているものがひとつもない。いずれも興味深く、それぞれに可能性を感じさせた。

最優秀新人賞の田村虹賀『空間に調和することのレクチャー』は、身体と空間の関係についての鋭い意識があり、加えて音響でも緻密に空間を構築しており、舞台上にひとつの世界を立ち上げようとする強い意思を感じた。来年の受賞者公演では、良い意味でこちらの予想を裏切り圧倒するものを見せてほしい。

奨励賞は上田園乃『Is it shaking now? The ground, or me?』と阪田小波『ああ、俺はあと何回膝を曲げたら死ぬのか否か』の2つが選ばれたが、よく考えられた振付をさらに外の世界に開いていこうとする前者も、亀の阪田イチローを相手にハプニングを怖れず、むしろそこから生じる本物の瞬間に賭ける後者も、いずれも面白かった。

ベストダンサー賞の横井伽歩『Peeling Scales』は、繊細な表現はもちろん、現在の自分の殻を破って先に進もうとする希求が心に残る。杉野真尋『幻惑のマーヤ』も、その鋭い踊りが印象的だった。視覚的イメージから出発するのよ『Chrysalis』には、ロイ・フラー、オスカー・シュレンマー、アルヴィン・ニコライらの系譜に連なるユニークさがある。多炭真歩『机の中のごたごた』は、未完成ながら、動きに風変わりな魅力があった。

浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）

今年はそれぞれが独自の境地を切り開こうとしている姿勢が印象的でした。

最優秀新人賞を受賞した田村虹賀さん『空間に調和することのレクチャー』は、なかなか見たことのないものを見たという点で、作品として非常に見応えがありました。美術、ファッション、ダンスなど多岐にわたる活動を全て独学で切り開いてきたという彼女の踊りは非常に独特で、すでにある型を習わないということで、人間は、こんな動きをする可能性も秘めていたのか、という新鮮な驚きがありました。

奨励賞の上田園乃さん『Is it shaking now? The ground, or me?』は、テーマに沿った振付の構成・展開の仕方が上手く、エンターテインメント性の高い作品だったと思います。振付家としての基礎力が高い方だと感じました。

同じく奨励賞の阪田小波さん『ああ、俺はあと何回膝を曲げたら死ぬのか否か』は、ご実家で飼われている亀と踊られていました。コントロールできない亀の動きに翻弄されながら踊る様子に、ままならないものと生きる人間の性を感じました。

ベストダンサー賞の横井伽歩さん『Peeling Scales』は、高い身体能力を生かした振付で、しっかりとした技術がありながら、それを壊して、新しい自分の動きを開拓されようとしている姿勢が評価されました。

杉野真尋さんの『幻惑のマーヤ』も、ダンサーとしての身体能力、表現力は抜き出ていましたが、これまでやってきたことからさらに、より広い視野を持ってご自身の踊りを拡大していかれることを期待しています。

のよさんの『Chrysails』は、人の身体が光の線画になって見えるというアイデアは非常に惹かれるものがあったのですが、それをどう振り付けるかというときに、美術のポテンシャルを引き出しきれていないように感じて惜しかったです。

これだけたくさんの情報が溢れる中で、ご自身の踊りを生み出そうとするみなさんの挑戦には、私自身、改めて励まされます。今後もダンスの境界を拓けるパフォーマンスとの出会いを楽しみにしています。

吉開菜央（映画作家、ダンサー）